九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州方言の特異性（四）

吉町，義雄

https://doi.org/10.15017/2557124

出版情報：文學研究. 3, pp.69-104, 1933-02-25. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

九州方言の特異性（四）

吉町義雄

九州方言の文學（續）

明治維新以後文運の隆盛が產んだ夥多なる文獻に面して、新聞の經濟欄や雜誌の雜錄類に至る迄博捜渉漁し悉して九州方言の片言隻句を迄懸竝べるのは不可能と云ふよりも或は無意義と稱す可きであらうか否かは暫らく置いて、自分の寡少な見聞中最重要不可缺と信ずる物を左に逐次陳列するに當り、中央文學と鄕土文學、作者出生地別と作品言語種、その他色々な分類の試はそれ〴〵様々な色彩の裝を呈するであらうが、名稱の適否は兎も角今は便宜上から自分は都會資料と地方行事とに二大別し、何れも主として作品年代順を經とし方言種目別を緯とする配合樣式に從ふ事にした。

都會資料に包含されたものは小說たると詩歌たるとを問はず更に創作と編纂とに組分けられたが、今は先づ創作方面から繰展げられるのである。

坪内雄藏（逍遙）博士が春のやおぼろ戯著として明治十八年（一八八五）に世に出された「一讀たうせいしよせいかたぎ三歎當世書生氣質」（

春陽堂「逍遙選集」別冊第一卷所收）は今や明治文學の古典となつて了つた樣であるが、その第一回の始に於て

心づくしや陸奥人も、慾あればこそ都路へ

と云ふ文句を作者の出生地や少年期を考慮に入れて翻く時、その「じやらう」や盛に「ちよる」を連發する須河が同じ回の終の方に於て小町田と會談して

あゝ、辛度々々

と出してゐるのは、全二十回を繰つても斯かる言葉が無いだけに、此の恰も三百年前の「日本風土記」の山歌に見られる祖語と同形式にある九州方言は作者の附した註に於ける得難き方言意識と相應じて誠に是をこそ畫龍點睛の趣あるものと評す可きなのであらう。自分は今敢へて此の註を左へ轉載するに當り、今度は東京堂の「明治文學名著全集」第一篇（大正十五年三月）の本文十四頁に在るが儘の體裁を句讀點行數字詰共に守る事にする。

【作者曰く。須河の言語は如何なる地方の言語なるかと不審をいだく人もあるべし。こは何處の方言と定まりたるものにあらず。書生社會に行はるゝ駁雜なる轉訛方語と思ふべし。蓋し書生中には上方の生にありながら態々土佐方言なぞを眞似る者ありて。一概に何處の方言とも定めがたければなり。】

僅か六十五年前に處も同じ飛鳥山へ遊山の途次大に力み返つた筑四郎や筑五郎が是では餘り可哀さうではないかと非難してはならない。此の年（明治十八年）に彼の佛人ピエール　ロチ事ジュリエン　ヴィオ（一八五〇（嘉永三年）生　一九二三（大正十二）歿）が海の彼方から長崎を訪れてゐるのである。そして二年後にはその「お菊さん」を世に出してゐるのである。篇中僅

かに *Kangourou*（勘五郎）や *Diou-djen-dji*（十善寺）位が散見するにはしても、其の七月十三日の所で女主人公が發する土耳古語ならぬ *Nidzoumi*（鼠）は百餘年前是亦殆ぎ同年輩で同處を訪れた瑞典の青年植物學者の手記（「九大國文學」第一號拙稿參照）に上つた日本語の一と發音を等しくするからと云つて見逃し難き長崎土語の片鱗なぎゝ力んではならない。此の記憶す可き西南文學の佳什も伊人ヂャーコモ　ブッチーニ（一八五八（安政五年）生一九二四（大正十三）歿）の「お蝶夫人（ヤグムバタフライ）」（明治卅七一九〇四）と同樣方言意識の上からは格別長崎の香を發揮してゐないのである。否吾人はロチと同年生れの小泉八雲事ラフカデイオ　ヘルン（一八五〇（嘉永三年）生一九〇四（明治卅七）歿）が數多くの作品の中で松江時代（明治廿三年八月—同廿四年十一月）を描いた「知られぬ日本の面影」（第一書房、邦譯「小泉八雲全集」第三卷所收）には邊境の地に語られる出雲訛りや更には隱岐方言に迄可なりの關心を示してゐるのに、熊本時代（明治廿四年十一月—同廿七年十月）ではその「東の國から」（邦譯全集第四卷所收）の中に「九州學生」なる項さへあつても言葉には全然無頓着なる事實なぎの方により多くの興味を見出ださなければなるまい。

夏目金之助（漱石）（慶應三（一八六七）生大正五（一九一六）歿）が舞臺を土佐に求めそして俚語は松山のを以てした「坊つちやん」（明治卅九一九〇六）は四國、否中國の方言文學に取つても如何なる役割を勤めるかと云ふ樣な事は今更らしく觸れる場合では勿論ないとしても、當時一盛の流行を見せてゐた方言熱や更には世情を背景に置いて考へると各種幾多の話題が提供される筈であるが、同年内の半年後に書き上げた左の同じく短篇物は或は人々に却つて逸せられないとも限らない。

「二百十日」（明治三十九年十月、雜誌「中央公論」掲載、岩波「漱石全集」第二卷所收）　「三」の所に於て阿蘇郡の下女の所謂肥後訛りが兎も角三十數回活躍してゐる。曲りなりにも實感だけは柔順に寫してあるから、是位

の材料と對比しても一九の殊に肥後辯なごと稱する物の如何に盲蛇的まやかしものなるかは容易に納得されよう。

併し「三四郎」（明治四一一九〇八）を始として以後かゝる試の見られないのは、小泉八雲の體驗は暫く意識外に置くとはしても、次に掲げる文人の態度と比較して見て誠に津々たる興趣が湧出しはしまいか。

德富健次郎（蘆花）（明治元（一八六八）生昭和二（一九二七）歿）が壯年時代に世に問ふた「灰燼」（明治卅三作一九〇〇）や「おもひ出の記」（明治一九卅四一九〇一）に筑紫言葉を用ゐなかつたのは、種々な意味に於て穩當と評し得ようが、流石に晩年の大作には彼の御國訛を遠慮なく採用して居る。

「死の蔭に」（大正六年三月初版、新潮社「蘆花全集」第十一卷所收）　上の卷「門出から九州めぐり」に於ては豐後路には矢張り特異性は先づ見られず、日向路には「可愛獄（かいがたけ）上」に少々示されてあり、薩摩路には「美しい薩摩」「櫻島」「南洲山莊」「名殘の半日」の諸項で記されてある方言は鹿兒島言葉でなく肥後辯であるのは寧ろ當然と評し得ようし、肥後路になると前半の肥後地方の諸所には本格的なお國訛りを挿入してゐる。中の卷「南滿洲と朝鮮」に於ては南滿洲の部の初の方に熊本言葉が一回見え、奉天の所には特に「肥後言葉」なる一小項さへあつて僅かながら會話を採入れて居る。

「竹崎順子」（大正十二年四月初版、「蘆花全集」第十五卷所收）　全二十八章中で第三・十一・二・三・五・七・二十・二・三・四・五・六章や附錄の和歌の序に肥後訛が活躍してゐるが、特に第二十四及び二十六章には甚しい。

「富士」　第一卷（大正十四年五月初版、全集第十六卷所收）は全廿八章中で第一・二・四・五・六・七・九・

十二・三・四・五・六・七・八・九・二十・三・六・七章に於て同じ方言が盛に織込まれ、第十七章には些少ながら長崎方言さへ見える。第二卷（大正十五年二月初版、全集第十七卷所收）は全廿二章中で第四・五・六・七・九・十二・五・七・九・二十二章、第三卷（昭和二年一月初版、全集第十七卷及第十八卷所收）は全十四章中で第一・三・四・六・七・八・十・一・二章、第四卷（昭和三年二月初版、全集第十八卷所收）は全十七章中で第一・二・五・七・十・一・六章が吾人の眼を惹く。

北原隆吉（白秋）氏の創作も九州方言を混じた作品をこ探すこ案外に寥々たるものであるが、その所謂筑後の柳河語こ銘打つものは此の方面では或程度の古典的の響を人々に與へる樣になつて了つたらしい。

「思ひ出」（明治四十四年六月初版、アルス「白秋詩集」第二卷、同「白秋全集」第二卷所收、同「白秋小唄集」、改造社「新選北原白秋集詩歌篇」、新潮社「現代詩人全集」第五卷、改造文庫「作曲白秋民謠集」抄出）氏の出世作たる此の詩集は「序詩」以下八篇を含むが是等の中、「過ぎし日」全二十章、「おもひで」は全十九章、そして「性の芽生」全三十八章、「TONKA JOHN の悲哀」全十九章には各一章乃至數章宛に訛語が見られ所々には註釋さへ附してあるものが存するが、「柳河風俗詩」全二十三章は殆ど全部に豐かな地方的情緒が彼の故鄕の言葉の混用によつて漂はされてゐる。「そりばつてん」を阿蘭陀訛こ斷ずる樣な蛇足は兎も角こしても、「思ひ出」全篇は例へば足長子の戯名を附して友こ共に著された「手長足長個性教育膝栗毛」（昭和五年、日東書院）に於て（二〇〇頁）松月秀雄博士に親しみを感じさすのみならず、特に「柳河風俗詩」の如きは時に等しく西國語圏内に入れられる可き地に生育した非九州人なる兼常清佐博士をしてその「音樂巡禮」（大正十四年、岩波）に於て（二二〇—四頁）方言

詩化を眞摯に高潮せしめるに至つてゐる樣な有樣である。

「日本の笛」（大正十一年四月初版、「白秋全集」第七卷所收、「新選北原白秋集詩歌篇」、「作曲白秋民謠集」抄出）　その全四百編前後の中で「蟹味噌」八篇には筑紫の方言を働かせてあり、是は全集に於ては南方民謠集の副名を附された部分の中の「朱欒の花」の項に納まつてゐる。

「あしの葉」（大正十三年十月初版、「白秋全集」第七卷、「新選北原白秋集詩歌篇」所收）　其の「BAN-BAN」は方言味が豐かである。是は全集では前記「朱欒の花」の項に收められてゐる。

「北原白秋地方民謠集」（昭和六年九月初版、博文館）　九州の部では八幡の「八幡小唄」第四部に明白な語法が存するのである。

尙氏の九州方言は是等韻文の外に散文にも僅少ながら既に活字化されてゐる。

其の自筆本を今日現に島津博物館たる尙古集成館（鹿兒島縣薩摩郡吉野村市磯）に保管陳列される薩摩藩士毛利治右衞門正直（寛曆十一（一七六一）享和三年（一八〇三））の「大石兵六夢物語」は其の天明四年（一七八四）の自序に由れば先師なる川上氏の書始めたものであり、是を彼一流の麗筆を以て中央古典語に改めた樣に思はれるが、此の元來當時の治世を諷刺したと言はれる鄕土文學作品が所謂薩摩文學の粹としてその詞藻構想を尊重愛好され古來幾多の人士に新趣向を凝らしたる挿入繪畫と共に轉寫刊行されて居ることはしても、その誇の一である可き特異なる言葉の如實の姿を文字に留めて置かなかつたのは、隼人達の大なる過失では無かつたらうか。舊藩時代に生ひ立つた人々が拉丁語や寺院スラヴ語たる漢文や日本文語の羈絆を破つてその生得の口語をありの儘に寫して置かうと云ふには、異常なる環境でなくとも餘程

の穎悟と自覺とを要する性質の物なのであらうか。例へば明治十八年二月に何れも東京市芝區愛宕下町の麗城館と開益堂とから發兌された和裝菊判二冊本には「ごふす天窓方言兒と手盛の間前髪少々殘るをいふ」（巻之上四頁）「黄朧黄朧は支那音なん麗島方言」（巻之下二十五頁）位の用意はしてあつても、勿論吾人が目下求める對象には列せしめ難いのは言ふ迄も無い。

十六七世紀の交に近衛龍山公が薩摩方言で詠まれたと稱される短歌が「物類稱呼」巻一「ぬすひと」の條に存するのを無視出來ぬ限り、同樣眞僞の程は不明だが賴襄（山陽）（安永九（一七八〇）生天保三（一八三二）歿）の作歌と云はれるものが戸田翠香の編輯に係る小冊子「鹿兒島ことば」（明治二十二年四月、絶版、雜誌「方言」第二巻第九號昭和七年九月覆刻轉載）に見えてゐて（八―九頁）卽ち

をごじよだち　ちよとでち　みてみやれ　さくらじま　づたんべらから　つきがいっでた

なる逸外資料を此處に改めて紹介する必要を感ずる。

かくて重永義榮氏が紫雲山人の雅號を以て明治末年から主として鹿兒島新聞へ連載された作品は仲々得難い文獻となるのであつて、隨筆的、卽興的の短篇ではあるが、會話は殆ど全部薩摩方言もて物され而も鹿兒島市の言葉に間々作者が出生地なる薩摩郡入來村其他のものを交へて居り、「チェスト」や「コラ〳〵」に二三の代名詞と助動詞位より剔味の無い中央の同好者に取つては珍重す可き資料となる筈である。何れも單行本に纒められたが今や絶版入手不可能、合本重版の計畫も仲々實現は難しい樣だし、著者の手許にも散佚、僅かに縣立麗島圖書館に於て見られる。

「作人五郎日記」（明治四十五年、大正元年八月再版、鹿兒島市、吉田書房、四六判本文二〇四頁）「實業新聞」へも揭載されたるものを含む。作者の故鄕の田園生活描寫であつて、此の作品だけは地の文は文語體である。本

編は「さみだれ日記」「取り上げ日記」「菊月日記」の三篇に附錄十三篇を附加してある。近來の普通語流行につれて「餘所口」を遣ひ、語尾に「です」「ます」さへあれば正直正銘の「余所もん」と見るなど云ふ叙述（一五―六頁）は大に敎へられると思ふ。

「下駄一代記」（大正三年九月、同、四六判本文二〇六頁）　「木履物語」「夫から書」「下駄の一代記」の三部に分れ、何れも桐木下駄之助、字は革緒、號は木履が自叙傳の體裁であつて、附錄には本編と全く無關係な短篇寫生文が六篇見られる。地の文は以下凡て口語體である。東京化した薩摩言葉の一二例（五四頁）は面白い。

「何々の記」（大正四年七月、同八年五月再版及三版、同、但し店名のみ吉田書店、三五版本文二〇〇頁）

「鹿兒島新聞」連載の物の中「…の記」なる標題の作品、但し既刊を除いて廿六編を集む。鹿兒島語には好く「ど」を付けて語ると云ふ記述の見える（四九頁）のは記錄す可きである。

「妻ノロジー」（大正五年七月、同八月再版、同、四六判本文二〇〇頁）　新聞連載の日記十八篇を收む。西京生れの婦人が「ごす」を混じて薩摩言葉を使ふ所（一四一―二頁）は仲々味がある。

大泉淸（黑石）氏が雜誌「中央公論」第三十五年第九號（第三七四號、大正八年九月）以來數年に亙つて發表された說苑や創作には所々に九州特に長崎地方の方言が用ひられてあり、只作者は讀者の理解を懸念して純粹なる九州辯丸出しは是を控へわざと東京辯化したものを示したのださうであるが、それでも同業者達からは地方臭い所が多過ぎると云ふ非難を受けたと云ふ。作品は全部各種の單行本に收められたが悉く作者の手許には散佚して了つてゐるのである。

「俺の自叙傳」（大正八年九月號より同十一年九月號、東京毎夕出版部「人間開業」、小學館・集英社「現代ユウモア全集」第十卷「當世浮世大學」所收）

「黄夫人の手」（同大正九年一月號、南北社「戀を賭くる女」、春秋社「血と靈」、同「黄夫人の手」所收）

「代官屋敷」（同大正九年二月號、「戀を賭くる女」には所收）

「長崎夜話」（同大正九年四月號、盛陽堂「天女の幻」所收）

「大泉萬歳、黑石萬歳」（同大正十二年十月號、紅玉堂「人生見物」、文祿社「人間廢業」所收）

その他の刊行物へも氏は多くの長崎關係の作品を發表されてゐる。

復活の意を葡語もてせるれなせんさ會の雜誌「奈雅瑳奇」（長崎市萬屋町五十二番地、牟田口金太氏方）第一卷第一冊（昭和七年一月）から連載されてある田北耕也氏の「舊きりしたんの研究」に散見する南部肥前の會話は正確なものではあるが元來が文藝作品の意圖を以てしたものでなく、從つて吾人は同誌第一卷第二冊（昭和七年十月）に於ける次の二篇を記錄して置かなければならない。

「長崎鎭遠騷動」（廿四頁分）　明治十九年八月一日に入港した北洋艦隊乘組の支那海兵と長崎市民との爭鬪顚末を永見德太郎氏がその故鄕の方言を巧に配して特に本誌へ寄せられたものである。

「紙挾み」（十六頁分）　蒲原春夫氏がその幼時の思ひ出を土地の言葉を交へての創作。

辛うじて三號雜誌の運命を免れた「筑紫文學」（九州帝國大學學友會文藝部、昭和二年十月—同四年十一月）は元來同人の創作發表を主旨としたのであるが、吾人の對象は何れも第二號（昭和三年六月）掲載の次の僅か二箇の小說

しか見られないと云ふ實狀である。

「地底の人々」（五頁分）　佐々木學氏が小竹丘眞なる匿名もて佐賀縣東松浦郡岩屋村の方言を會話に於て示したのであるが、例へば雜誌「改造」第十一卷第十號（昭和四年十月）へ揭げられた林芙美子女の「九州炭坑街放浪記」に類した作品である。

「酒の話」（十二頁分）　村山益勇氏が創作であつて會話は同じく佐賀縣三養基郡地方の方言を以てしてある。

因に佐賀方言と云へば「大阪每日新聞」の「西部每日」佐賀版には昭和七年十月九日から「佐賀ばなし」なる一口噺の小欄が設けられ問答體の實例が連日現れてゐるが、是は栗原荒野氏の筆に成るのである。典型的九州方言圈內にあつて而も「ーあん」の飛地や範圍の問題は暫らく除いても其の「ーあんた」「ーあなた」の語尾に由つて或程度の言語島を形成する佐賀方言が小區域なるに不拘古來常に何等かの材料を供給する點は吾人の喜とする所なのである。

「福岡日々新聞」が揭載した數多くの小說中で會話に豐富な九州方言を盛込んだ作品は最近では次の三箇を擧げる事が出來る。何れも夕刊連載である。

「女像誘拐」　昭和三年十二月十八日付夕刊（配達は十七日）—同四年三月十六日付夕刊　舞臺は博多であるが作者の上野虎雄氏が出身地の關係上、筑後の大牟田市や肥後の阿蘇郡の方言が用ゐられた。

「犬神博士」　昭和六年九月廿三日付夕刊—同七年一月廿六日付夕刊　百八回　博多出身の杉山泰道氏が夢野久作（博多方言にて浮かり者の意）なる雅號で物したのであつて、會話は標準語や近畿方言も多かつたが、北九州の言葉がよく寫し出され、特に博多部のそれは土地兒ならずんば驅使出來ぬ樣な特殊な語法が見られるといふ評判であつた。

「神風連」　昭和七年九月一日付夕刊から目下連載中　神戸市出生の十一谷義三郎氏には丸で外國語たる肥後方言がかくも夥しくかくも巧に使用されてあるには勿論充分な苦心が隠れてゐるのであつて、滯熊約一箇月毎日各階級の老人から聞いて日記に認めたるもの、肥後狂句の研究、一九の肥後辯や熊本市誌の方言集さては石原氏の神風連干仔文章扣、熊本鎭臺士官未亡人（作者居住地在住）直接の敎示、太田黑氏遺族が特に作者の爲に熊本辯もて書いて與へられたる資料、是等を以てしても作者は毎日泣かされて居ると云ふ精進振なのである。

最後に若山甲藏（藏六迂人）氏の「日向の言葉」（宮崎市東雲町一丁目、宮崎縣政評論社）第一卷（昭和五年十月、絶版）の卷末（二〇三―四頁）には「夕暮」と題する日向方言自由詩一篇が、同方言書の第二卷（昭和六年六月）には（二〇八頁）盆踊の譜に合ふと云ふ日向方言歌一箇が轉載されてあり、吾人は今後かゝる文獻の成長を益々期待しなければならない。

次に都會資料としては殘る編纂部門を簡單に紹介する順序となる。是は必然的に歌謠類のみを包攝する結果となつた。今吾人は一面九州の地方行事に筆を進める橋渡しの意味に於て、先づ中央書肆で從來刊行されたものに於て論述對象を改めて指摘する事とし、然る後に九州各地の鄕土資料を羅列するが、郡誌や案内記類に散見する物は之を省く。抑々最初から方言意識の意圖のみを以て上梓された歌謠なるものは皆無と稱してもよいかも知れず、民謠、俚謠、俗謠さては小唄等樣々の表題を附されてはゐるものゝ、總じて方言の特異性を表す物は矢張り現代でも少い樣だ。

博文館「續帝國文庫」第四編「日本歌謠類聚」下卷（明治三十一年五月）の「其二　地方唄」は多方面に亙つて蒐めてあり、序に當る所に於て（一頁）大和田建樹は

地方唄は報者の草稿を其まゝに寫して成るべく純粹無垢の方言を味はしめんとつとめた（略下）

とはあつても方言要素は殊に九州地方の部分には看取されない。

文部省文藝委員會編纂の「俚謠集」（大正三年九月初版）は長連恒氏の編輯校合になり、「緒言」には（二頁）

方言はなるべく之を保存し、原意の推測せらるゝ限りは傍に記して、一見知り易からしめたり

とはあるが、九州七縣に關しては鹿兒島縣を除いては全く問題にならないし、高野辰之（斑山）博士と大竹舜次（紫葉）氏との「俚謠集拾遺」（大正四年四月、六合館）に於ても同じく鹿兒島縣を除いては吾人に取つて別段目を惹くものは含まれてゐない。

然るに同じ高野博士の「日本歌謠集成」（春秋社）卷十二「近世篇」（昭和四年二月）は「解說」に於て（六頁）

轉訛語の原形を知り得がたくて、適當な漢字を見出さなかつたもの、混在する（略下）

となつて居り、第三編なる「九州沖繩俚謠」には可なりの材料が盛られてあり、例へば福岡縣の童謠の中に見える（六二五頁上）「だい」なる語尾形は九州方言味の「たい」位が未だ未だ中央人士には認識されて居ない面白き實例と言へようし、大分縣には「方言唄」、宮崎・佐賀・長崎・熊本各縣には「方言詞」、そして鹿兒島縣にはその何れもが設けられてあり、古書からの引用もあるが中には他の經つた俚謠集には餘り載せられず而も人口に膾炙されてゐる例へば肥後の「おてもやん」の如きもあつて大に興趣を添へてゐるのである。

長崎縣は「松の葉」以來舊幕時代に支那や泰西の文化に接觸してゐる爲單なる九州方言問題に限つて見ても何時も賑かである。東北人なる鈴木力（天眼）が古く物した小冊子「新長崎土產」（明治廿二年九月、同三年二月再版、長

崎市、新街活版所、絶版）に所謂蜀山人の作と傳へられる例の狂歌と「ほうかい」節とを一首宛錄した序に書留めた問答體の一齣（九七―百三頁）は大體に於て長崎言葉の眞隨をよく攫んだと評す可きであらうが、浦川和三郎氏の「日本に於ける公敎會の復活」前篇（大正四年一月、長崎市南山手町、天主堂、絶版）には南蠻の香高き數首が拾はれ、長崎市役所の「長崎市史」風俗編（大正十四年十一月）下卷なる第拾參章「童謠」には紅毛や唐人の味豐なる草々の品數が並べられてあるのは此處に今更らしく紹介する迄もないであらう。最近には田島久雄氏の努力になる「長崎民謠集」（長崎市築町、森屋書店）第一輯（昭和六年五月）が出て、小冊子ながら古民謠、民謠、そのほかの唄、切支丹をうたへる歌、童謠の諸項目に分れ、諸書に所錄引用され來つた資料は大抵洩なく集められてあり、吾人はその第二、第三輯の完成刊行を切望して已まない次第である。

福岡縣では「九州日報」の昭和五年五月三日から六月一日迄斷續十四回に亙つて橋詰武生氏が「土俗民謠から見た原色の博多」を執筆されたが、是は鄕土文化研究會の雜誌「旅と鄕土」（福岡市本町廿七番地、同氏方）第壹卷第四號（昭和五年十一月）へ其儘轉載され此の種の物としては從來餘り見られぬ濃厚な方言資料を供してゐる。尙昭和七年五月から梅林新市氏が主となつて發表されてゐる謄寫版「福岡縣鄕土民謠集」（福岡市春吉四番丁六八六、福岡土俗玩具研究會）が何時か完成したら豐富な材料が得られるであらう。

宮崎縣は日向鄕土會編輯の雜誌「日向鄕土資料」（宮崎市神宮町六八八、日野巖博士方）第三輯（昭和六年七月、再版は同七年八月に第二輯と合本刊行）以來小川新一氏が連載されてゐる（既載第四・五・六輯）「方言俚謠評釋」に於て九州にあつてさへ珍重す可き此の地方の言語味に醉ふ事が出來る。

大分縣は大分縣教育會編の「大分縣鄕土傳說及び民謠」（昭和六年六月、絕版）があり民謠の部は七十二頁あるが方言の點になると盆踊歌と同樣殆ど問題にならず、鄕土史蹟傳說研究會の「增補豐後傳說集」（昭和七年七月、大分市舞鶴東町、同會）に僅かに混入する俚語の程度と大差が無い。

さて殊に中央の文獻では殆ど問題にもされない幾多の九州地方行事の中で方言資料を他に漁る時、筑後のみふし語、肥後の肥後琵琶は勿論だが、薩摩の兵六踊や仁才歌なども寧ろ吾人を失望さす性質の樣であり、從つて長崎（現在絕滅）、博多、鹿兒島三市にのみ見られる方言繪端書や各地に僅か宛出沒する名產菓子類の附屬印刷物に迄眼を向けるとすると、吾人は最後に以下略述する九州三大鄕土的方言文學資料、乃ち東北九州の豐後淨瑠璃の殘存、西北九州の博多仁和加の傳統、南九州の肥後狂句の發展に對して是非讀者の注意を喚起しなければならないのである。次に展開する順序は方言と地理とを考慮した結果である。

何れも元來輕口滑稽から發達した狂言ではあるが寶曆（一七五一—一七六三）頃起つたと云はれる江戶の茶番に對應する上方の俄は元文（一七三六—一七四〇）頃に始まつたとされてゐるのは既知の事實であり、是等の原始的形態は無論もつと古へ遡り得るであらう樣な事は自分などが改めて說く迄もないとしても、大阪俄の如きは今や痕跡を留めない迄に廢絕して居り上方鄕土研究會が辛うじて昭和七年十二月十七日大阪北新地演舞場で再檢的の會を催した程の有樣であり、例へば雜誌「上方」第二十五號（昭和八年一月）の南木芳太郎氏が手記（一五九頁）に於ても一斑は解るのであるが、九州の博多仁和加こそ今日でも最も誇る可き鄕土藝術の一であらう。博多仁和加が中央の文獻に於ける片影や餘韻などは、例へば木谷蓬吟氏が「大近松全集」第十三卷（昭和二年四月）に於て（五三一—二頁）「博多小女郎波枕」上卷第二場なる

柳町の幕明きにある踊の滑稽なる一條は「博多二〇加」の面影が連想されるやうであるこされたり、又少く共現今では博多特有こ見做されてゐる半面卽ち眼鬘なども自分の眼に觸れた大阪の戯作者なる龜水軒浮木（生歿不詳）が噺本「滑稽卽席郡鄲枕」（文政四年一八二一）の後編「骨替桑花之夢」下卷に存する

二輪加こ云ふものは五十年已前上は大臣顏を半分隱し仕歩きし物也、これ半面のは此時分より初りしに今は絶えて無く多く藝者又は辨慶株のする事こは成りぬ、是は云うていらんさへ〳〵御免

など云ふ記述を見るこ今後も相當問題は頻出しようものゝ、下に追々揭げる種々の仁和加脚本集の序文や附錄に僅か宛拾はれる說明や觀察もさりながら、竹田雅弘（秋樓）が「博多物語」（大正九年四月、同六月再版、福岡市、金文堂、絕版）の中で（一七九—九一頁）甲（質問する人）こ乙（說明する人）この標準口語體の問答を以て試みた「博多仁和加」などは極めて乏しい此の種の沿革資料の恐らく白眉であらうが、三松莊一氏等が編まれた「趣味の博多」（昭和七年五月初版、福岡市東中洲二百十二番地、福岡協和會）の改訂增補三版（同十一月）で（六四—九頁）「博多仁輪加に就て」記される平田定吉（汲月）氏の文字も勿論味讀す可きものこ思ふ。

卽ちその起源を今から約三百年前に發し元來は盂蘭盆會に演ぜられた盆踊から轉化して遂に劇的形式を採るに至つた博多俄は寬永（一六二四—一六四三）年中に最も隆盛を極めたのであつて、是は博多が黑田家入封以前は天領であつた關係上、舊幕時代を通じて町人階級が那珂河一筋隔てた福岡藩の秕政に對して痛罵諷刺を加へ爲政者も亦是を許容する雅量を有して居たのであるが、組合は構成されても出演者は皆他に一定の職業を有する素人なる事、大阪俄や江戸茶番の如き歌舞伎式臺辭を用ひず純粹なる方言を以てする事の外に、道具や衣裳は凝らない樣に力める代りにボテ鬘は兎も角こ

しても彼の少く共現在では獨特と見做される天保二年（一八一三）に始まると稱される所謂半面の使用をその傳統的本質とするのであり、明治維新以來寧ろ當然ではあるが衰運に向つた今日でも勿論九州では他地方の類似物に追隨を許さないのみならず、本州地方に對しても恐らく遜色だけは些かも感じない鄕土藝術である樣な事は今更らしく自分などが繰返すには及ばないとはしても、方言文學の對象として扱ふ時左に數言を費す必要を感ずるのである。

抑々博多仁和加の脚本なるものは臺辭や動作は格別文字には現はさないのであつて、單に土佐半紙數枚を横綴にした畫帳が其儘脚本となるのであり、即ち各人の扮裝の畫を描いた傍へ配役者の名前を附し併せて出場の順序を附記してある。作者――是は時に役者を兼る事がある――は配役者一同に對して恰も芝居の本讀同樣、新作仁和加の筋を腹に入る樣に縷述し、筋の發展と受持の臺辭のメリハリの大意を述べ、最後の「落し」は普通作中の主人公が受持つ事になつてゐるが、臺辭の文句は固定的なものでなく、各自が筋の發展を妨げぬ範圍内で自由自在に頓智即妙の滑稽談諧を口に上すを得るのである。所で平田氏直接の御敎示に由ると此の筋書だけの脚本は現在迄に約六百幕發表されてあるが現在行はれるものは約二百幕であるさうで、是は元來仁和加なるものが其の時限りの際物である結果、時局を超越する小數のもの、みが永續的生命を有する譯なのである。此の外に平田氏の自作が既に約百三十七幕を算へ、同上の意味の永續性ある物は約四十幕であると云ふ。從つて吾人論究の素材を求めるとなると殊に活字化したる單行本は最近の所では僅かに次に擧げる物位であつて何れも福岡市内發行である。

一　竹田秋樓　「博多仁和加集」　大正三年四月、同四年一月再版　善敎堂書店　絕版　四六判　本文二三八頁

寫眞三葉口繪の中一葉は所謂脚本の見本を示してある。卷頭には「博多仁和加の由來」（十一頁分）が記されてあ

り、脚本は「歌は豫言　五幕」（一―三七頁）「大滿作　三幕」（三八―五七頁）「夢の上納　三幕」（五八―八一頁）「時の流行　四幕」（八二―一一八頁）「借錢消費組合　三幕」（一一九―七三頁）の五篇が收められ、附錄として「博多の方言」（一七四―二三八頁）は五十音順の合計約千五百語を蒐めてある。以下の脚本に於ても然りであるが、故人なる竹田は福岡部出身の人ではあり殊に此の附錄などは博多部出身の平田氏の手が餘程入つて居るさうであるが、誤植以外に大分間違が存するらしい。尙本書で（一七四頁）豫告された「博多仁和加集」第二輯なるものは出版されなかつたのであるが、「放送講演集●九州方言講座」（昭和六年五月）の「福岡縣の方言」の博多仁和加語例（三四―九頁）は本書所收脚本の最初數篇から抽出された樣である。

二　普啼齊拔天　「新作滑稽博多一人仁〇加集」　大正五年十一月十八日　郡文園堂　絕版　袖珍判　本文一九九頁
昭和四年六月增補五版　春吉二番丁中通　中島勉强堂　袖珍判
本文一二八頁

博多方言の間投詞「ふてー」と接續詞「ばってん」とから成ると考へられる此の匿名者の本名は最早如何しても分らないのであるが、舊版は二百五十餘箇の、增補版は二百六十餘箇の方言もてせる所謂口合（くちあひ）、一口噺を收めてある。增補版には附錄として「博多節」（一二七―八頁）がある。

三　內野環星　「博多仁和加大會」　大正五年十一月二十日　間部房吉　絕版　菊判和裝　本文百頁二段組

卷頭に寫眞六葉を揭げ例言の中には

方言は出來る丈け、其儘を漢字に當てはめて居ますが、『れ』『で』の區別丈けは讀み辛いので訂正して居ます

ミ云ふ文句が見える。脚本は「夫婦家立　一場」（一―三頁）「樂は苦の種　三場」（四―一七頁）「理學の椅子　二場」（一八―二五頁）「車上の夢　四場」（二六―三七頁）「親煩惱に子畜生　二場」（三八―五三頁）「早合點　二場」（五四―七頁）「青島凱戰　二場」（五八―六一頁）「藝者の仇討　二場」（六二―七六頁）「博多風流日露戰爭國盡し　一場」（七七頁）「最大急行忠臣藏　一場」（七八―八七頁）「博多風流一人仁和加歐州戰爭國盡し　一場」（八八―九頁）「よみぢかへり　二場」（八九―九六頁）「逆せ引下げ　二場」（九七―九）「花合せ　一場」（九九―一〇〇頁）の十四篇が見られ、外に「一口俄」合計十三篇を中間に（三・二一・三〇・七・四八・八七頁）挾んである。因に本著者内野健吉氏は福岡部の出身であるが、發行者は俄師の一人なる博多兒である。

四　環星・秋樓　「新選博多仁和加」　大正七年四月、同七月再版　勉强堂書店　絶版　四六判　本文二七〇頁

口繪寫眞四葉を掲げ卷頭には秋樓の筆になる「博多仁和加の由來」（四頁分）を置き、脚本は前掲の「一」及び「三」から代表的傑作とも見るべきものを撰拔し併せて誤植並に遺漏を悉く訂正補綴したと稱するもので、卽ち前篇には内野環星氏編の「樂は苦の種」（一―二七頁）「理學の椅子」（二九―四二頁）「車上の夢」（四三―六〇頁）「親煩惱に子畜生」（六一―九〇頁）「最急行忠臣藏」（九一―一〇八頁）の五篇を、後篇には竹田秋樓編の「夢の上納」（一〇九―二九頁）「時の流行」（一三一―六一頁）「借錢消費組合」（一六三―二一〇頁）の三篇を集めてあるが、以上の間に總計五箇の「一口仁和加」（二八・四二・九〇・一三〇・一六二頁）を挿入してある外に、附錄として「一」と大同小異の秋樓の手になる「博多方言集」（二一一―七〇頁）が加へられてある。

五　内野環星　「新編博多仁和加」　大正十年二月　西日本之實業社　絶版　四六判　本文二六八頁

包紙には「博多文庫」第一編と見え、寫眞口繪四枚（八頁）を掲げ卷頭には內野氏の筆になる「博多仁和加の變遷と現狀」（四頁分）を配し、脚本は前篇に「萬歲と念佛　二場」（二―二三頁）「稻荷の御利益　三場」（二四―五七頁）「一家の芝居　三場」（五八―七七頁）「犬の相撲　四場」（七八―一〇五頁）の四篇を、後篇に「洋服の振袖　三場」（一〇六―二五頁）「淨瑠璃大會　三場」（一二六―三八頁）「三國の力味合ひ　一場」（一三九―五〇頁）「厄祝ひ　二場」（一五一―七頁）「人間萬事鬼の世の中　二場」（一五八―八五頁）「平和の獨々逸　一場」（一八七―九八頁）「借錢鳥退治　三場」（一九九―二一四頁）「九州滊車旅行」（二一五―二一頁）の八篇を入れてあり、總計十一箇の「餘興用一人仁和加」（一〇五・五七・八七・二二二・三・四・五頁）を挿入してある。因に本書の「豫告」に見える同著者の「ふてーがツてーごうぢやろ會」なる博多仁和加古今脚本集は刊行されなかつたのである。

六　東雲道人　「寶廼入船日龍同盟」　大正十三年十二月　高木喜七　絕版　四六判　本文一六八頁

博多部出身の高木喜七氏がその煎餅商の餘技に表記の匿名もて上梓した五幕物であり竹田秋樓の手が入つて居る。博多辯以外に標準普通語を用ふる人物も僅かながら出現するのは他の作品に於けるこ同樣で格別珍らしくないが、第三幕目第一場に一回見える（六六頁）肥前言葉の女のお國訛りの趣向は此の種の物にあつては前例がない樣であり、此の僅かな佐賀方言は博多言葉に對して面白き特異性を發揮して居るこ思ふ。本書は附錄こして「一」「四」こ同じく秋樓の手になる「博多の方言」（八一頁分）九百餘語が添へられてあるが是は別冊こしても販布された樣である。

七　穗亞誌雨愁　「新作博多仁和加」　昭和四年四月、同八月三版　春吉二番丁中通　中島勉强堂　菊半截判　本文二〇八頁

帆足眞藏氏が表記の匿名で物されたのであつて、始に著者の筆になる「素人の仁和加觀」（一―一四頁）があり、脚本は皆一幕數場からなり「福の神は何處へ行く」（一五―四二頁）「地獄土產」（四三―六三頁）「新しい夫と舊い妻」（六五―八〇頁）「無理な計略」（八一―一〇〇頁）「金故の切腹」（一〇一―一二五頁）「幼稚園行進曲」（一二七―三七頁）「新文福茶釜」（一三九―五四頁）「頓珍漢の川流れ」（一五五―七四頁）「珍無類紀念の櫻」（一七五―八六頁）「色男の末路」（一八七―二〇六頁）の十篇を算へられ、各餘白に附錄として「新作謎々」が總計十題收められてある。本書に盛られた方言は著者の出身地たる筑紫郡太宰府町及び近傍の物であるから、學問的見地からは却て面白い資料となるのである。

今博多言葉の見本を左に傍註して示すに當り便宜上「四」の脚本集から抽出する事にするが、是等の文例は元來前述の如く內野・竹田兩氏共に福岡部出身の爲例へば「遣アさい」（下さい）としてゐる樣な點があり、原本誤植訂正を兼て淸濁分別共に自分が特に平田氏の修正校閱を經たものなのである。「つ」「ッ」の促音は別に區別は無い。

アラ吉藏ざんぢや無かナ、何うしなざつたこナ、腹ばし痛ますこナ
御免なざつせェ、爰元イ一人患者ば連れて來こります、何うぞ先生、診察ば、して遣アざつせい
然も、何うも無かけん何うするケ
是れ程思ひ込うぎるこイ愛想つかさるりや力がないこいふて、殘念相に下唇噛うで死んだやなア
お、彼處から豆腐屋の婆々ざんの來ござるヨ、あの人が何ンでも物知りぢや故、あの人イ一つ聞いてもをか

ノ

何處さい行ても元居つた處が一番よか如ある
雑談の如、何卒喰ふてやれこ言ふて頼うごるじやなかナ、夫れで喰へん雖んが奮發で喰うごるト、夫れェ何んごこ錢が拂われるもんかい
左樣ン言ひなざりや、まア、左樣で御座すが今日は私ア人の御使ひにや行きよりまつせん、是らア皆ンな自分の用で御座す
ウン、其許宅の嫫は、あらア仲々別嬪たい
夫らア又貴樣屑エーここしごるべ、都合はあツつろー雖も、何故五年も連れ添ふたあげな別嬪の嫫ば追出いたや
ンだまア、ごうした珍らしかもんぢやろうかい
嫁御さがすこイわざ〳〵お多福ば採さんばつて宜りそうなもんにイくさ
娘が褒めらるゝこが嬉しかこ言ひなざる雖も夫れが悪かこたい
ア、今のこは夢ぢやツつろうか、ごうした面白かこぢやツつろうかインなら、親爺ばくサ、モルヒネで殺いちやツてンなイ
左樣大きな聲しよツたぎんにやア、巡査が來らツしやるべェ
あんたクサ、起きなざれんか、吉藏さんの見えごりますばい
知ツごらにやこて

モシ茂三郎ざん、何うかマア一應德兵衞ざんば許いて遣アざす事ア出來まつせめいか

フンナラ今夜行くべー

ア、、ア、、あげん事ば言はんのきア良かつた

誰ナ誰ナ、人の死に居るこい止めたりなんしたり、あたきア止めなツたツちや詰ち死ぬこ。生き居ツたぎツたい碌な事ア無か、離しなれんか

の如くであるが、○印の所を若し無聲音（清音）で出すこ大抵は福岡言葉こなつて了ふ點を注意され度いし、語尾助辭の「ばい」「たい」は福岡、博多、周圍郡部共に粗略に言ふ時は「べい」「てい」こなる點も看過する事は出來ない。

此の外夙に例へば原田胡一郎が博多言葉入の「博多仁和加」（明治三十五年、絶版）があり、金山龜次郎氏の「正調博多節」（福岡市、川丈廣告部、大正十年九月、絶版）なる小冊子の附錄（七二頁分）には「博多節懸賞之人形」（二場）が存し、乏しいながらも探したら落穗はあらうが、何こ云つても前述の如く博多仁和加作者こしては平田汲月氏の右に出る人は無く、尤も今迄に活字化した發表は雜誌「福岡」（福岡市、東西文化社）第一卷第一號（大正十四年九月）に於ける「地震、雷、火事、親父」（三幕）のみではあるもの、、八枚組の繪端書「博多二〇加」（福岡市土居町、大崎周水堂）にも筆を取られ、昭和五年九月二十日からは「大阪毎日新聞」の「西部毎日」福岡版へ連日「けふの仁和加」なる輕口を缺かさず發表され、多忙なる運送店勤務の餘暇全力を博多仁和加新作に注いで居られるのである。

博多仁和加は此の頃よく脚本を募集され、作者としても既に名前の發表も僅かながらあるのであるが、吾人は最後に樋口龜吉（鐵幹）氏を紹介して置かなければならない。樋口氏は大正七年西比利亞出征以來此の方面に興味を持たれ昭和二年以來は種々の刊行物に既に約三十篇を發表され目下糟屋郡志免村の海軍燃料廠採炭部勤務の餘暇を擧げて執筆されつゝある。只氏の出生地が糟屋郡篠栗町なる爲アクセント其の他に於て生粹の博多辯とは多少異るけれども今や有力なる新進作家の地位を占めて居られるのであつて、福岡市では却て餘り知られないが自ら一座を引率して筑前北部諸郡の炭坑から招待を受けては自ら上演されて居るのである。

尙福岡市には昭和七年十月から博多仁和加を統一向上進出せしめんとする博愛社が出來て三島卷次郎氏が代表であるが、九州には博多の外に佐賀と熊本とにそれ〴〵の市に於て仁和加が存する。素面で行ふのと方言差異とを除けば大同小異の性質に屬する上に、何れも傳統並に規模共に博多のものには比す可くも無いし、活字になつて發表された脚本も未だ見られない有樣である。佐賀仁和加に就ては久保源六氏がその「肥前史話」（佐賀市吳服町、大坪惇信堂書店）第一編（昭和六年七月）上卷に於て（一九八——二〇〇頁）簡單な說明を與へて居られるが、規模はより大なる可き熊本仁和加に關しては實に今迄の所全然記述は發表されて居ない樣である。

方言もてせる狂句の中で九州と同じく邊陲の地なる土佐で行はれる土佐（狂）句は俗にテニハと稱され、是は元來雜俳と呼ばれる變態俳句の一種が德川中期に伊勢から移し創められて發達したものとされて居り、寬政天明頃から現代に至る句例はそれ〴〵の註と共に桐島像一氏の編まれた和裝橫綴の「土佐句テニハ集」（昭和四年十一月、高知市、富士越書店）に於て覗ふ事が出來るが、內容たる狙所や氣品は兎も角としてその十七字前後から成る外形たる言

葉遣に於ける方言味は決して期待する程のものではなく、此の點ではその由緒として加藤清正が朝鮮役で蔚山籠城の砌兵士の無聊を慰める爲に物したと云ふ傳說を有し現代でも熊本市には數百人の作者を見出す上に南九州一帶へ影響餘波を及ぼしてゐる肥後狂句の存在を無視してはならない。昔の事は知らず昭和五年六月一日から「九州日々新聞」の夕刊へ連載されたものを短評を一々附して中山鼎（霞山）氏が纒められた袖珍型「肥後狂句短評集」（熊本市京町本丁、稻本報德舍）第一輯（昭和六年十月）所收千三百餘首から左に摘出をしよう。因に字配は私見に由つて整理したのであるがルビは原本には全然附して無いので、特に中山氏の敎示を仰いだのである。

エヘンぱつと離るゝ影二つ
店先イ母親が來てむぞうがる

の如きは必しも九州方言としてさへも特徵は看取されまいが、その淸濁はルビに至る迄勿論嚴密に附けるとして

おもうさん打ちなはり元ごつちかる惚れたかな
ふくれ嚊打付けたごつ座つとる
こらいかう仇吉ちふは男ばい
正月ごまア虱の喰はんと着せなはり
痛からう嫁ごん飯の出來たばい
見せなはり米の仕切で無アごたる
まアお待ち提灯買イやつたけん

もうなァ來らした月もかたつさる
秋の暮悟つたごたる顏しても
ごうしたもんか死ぬるばなてち艶文の來た
深さ々々ごうして此處へ身投ぎうに
尼さんあゝたが狆な男たい
今夜こそ遲う戻つさ明けんけん
知りばしせんごつ他人の縫うた羽織着て
打ますばい涼うだ娘はりかゝせ
おさゝい來なはりあんたの儘アならうたい
困る〳〵こぎやん女の惚るゝなら
あぎあんさすけん娘は湯からきァ戻り
金子さへあればあんたの方がよか男
見て下はり二遍な拂ひきらんけん
大事なこつ乞食のさろく城の裏

なぎは水準的なものとしても

打ちますばいごういふ長ァ足だろか

あゝたくさい何處へ宿直なはつたか

の樣な例は九州に於てさへも一見して肥後方言たる事が分る代り仲々容易には拾へない所を味つて貰ひたい。肥後狂句は今後追々活字化されて行くであらうが、「大阪毎日新聞」の「西部毎日」熊本版では昭和六年十一月廿六日から「けふの肥後狂句」なる小欄を設け、一般人士の投稿から毎日二首宛を選んで是に適しき滑稽なる繪畫を配して掲載して居るのである。

「九州日々新聞」の肥後狂句は夙に南九州へ影響を及ぼして居り、卽ち是を模倣して「鹿兒島新聞」では明治四十一年六月二十日から「薩摩狂句」が募集掲載されて地元の方言もてする獨特の鄕土色が縱橫に發揮され、やがて重永義榮氏及び寺師宗一（若法師）氏の努力に由つて大に隆盛を極める事となつた。單行本は無いけれども、村林孫四郎氏の「鹿兒島語法」（鹿兒島市、吉田文世堂、明治四十一年十一月初版、絕版）には附錄として同新聞紙からの轉載十九首（一一八—二〇頁）が見られるが、今自分は東秀雄（禾鳥）氏が小冊子「鹿兒島著名案內」（鹿兒島市、榮文館、大正八年十一月、絕版）の附錄（一二六—三九頁）として矢張り同紙よりの轉載六十八首から「天」評點を附されたものを左に摘出する。原本に於て同じく方言もて附せられてある評も配列する事にするが、狂句のもの共にルビの添加や誤植の訂正は特に重永氏の御敎示を仰いだのである。

擔賣イにや武士も避けッ通ッつろ

大跨で急ッ威勢の强エ事ッ

無性五郎奇特な事ナ虱狩ッ

椽の日當イ褌一ッで
鯛の魚ニ酒樽が行たがぢやろ相な事ッ
媒酌や誰様ムんそかい
耳が痛て二言目には元ン妻女
時にや寫眞づい見せぶらけッ
コシッ奴梅雨時兒を產ッ何うすッかい
田植は田植襁褓や干がず
音を聞ッ座頭が笑るわい太皷踊
時にや手拍子ざん取ッ見たい
冷素麵芥子に座頭目をかやし
喫づんも爲じ食やッでんこッ

位でも方言以外に該地の民俗に通じなければ勿論一通りの味識は出來難いのは言ふ迄もないが、雜誌「方言と國文學」（郡山市栞根屋敷三七、山下邦雄氏方）に於て上記山下（路傍花）氏が試みられて居る「薩摩狂句評釋」（第一―三輯既載、昭和六年十月―七年五月）はやがて單行本となる筈であるが行屆いたものと謂ふ可きであらう。

肥後狂句及び薩摩狂句は日向地方へ影響を及ぼす事となり、純宮崎人なる目野清吉氏が丁勘切（方言にて蜥蜴の意）なる匿名もて「宮崎時事新聞」へ昭和二年十月廿日から方言もてせる狂句を掲載されたのが皮切であるが、翌三年十一月には

氏はその寫眞業の傍「へちま會」を結社し同志十人は創立以來の幹事として機關紙「へちま」（謄寫版）を毎月發行、方言狂句は此の外に前記新聞に「時事狂句」なる小欄が設けられ毎日ではないが數首宛同會關係の力作が發表されて今尙繼續、「日向の言葉」第一卷（昭和五年）の卷末には前記新聞掲載から拔いた五十首（一八一―二〇三頁）が註釋共轉載されてある。方言狂句は曾て都城市の「三州新聞」へも暫らく掲載された事があるさうであるが、自分は目野氏が編まれた和裝袖珍型「日向狂句」（宮崎市上野町三丁目、宮崎出版社）第一輯（昭和四年十一月）所收八十六首の中から左に數例を轉載するに當り一々附せられた註釋は勿論省くがルビ等は特に編者の校閲訂正を仰いだのである。

天の河見ちよる二人が握つちよる
宮崎邊にや流行おくれがモダンげな

なごは格別言葉だけでは九州としてさへ特殊相は表れてゐないけれども

ビロん葉に冬ん無國ん風が吹く
い、つぺこつぺ踊つ歩いてヒン疲れた
私嫌ア生好かん事冗戯らはる
死去つたか、あん婆ごんも若け時や喃
大人らしい最早姙娠れちよる娘よ
何程泣てん汝があん奴に與らりゆか

木枯に馬を吹かせち来だ呑ぢよる
錢が欲し何程歩てん落ちよらん
借錢なしてん燒酎ごま呑まにや汝
寒冷て夜ん氣ば鬼にして座頭ん妻

の如きは方言や民俗の註釋なくとも難解ならざる好實例と稱す可きであらうが、此の場合その「せ」「ぜ」は寧ろ其儘にして置いても「て」は凡て「チェ」と發音して初て日向狂句の面白味の生ずる點などは殊に中央の人士に味識して貰はなければならない。

元祿以前の古淨瑠璃が中央に於ては全く廢絶して今日僅かに僻遠の地方に殘存するもの、中、奥淨瑠璃一名仙臺淨瑠璃又は御國淨瑠璃と呼ばれるものは、夙に大槻文彦博士の研究（明治四十三年）があり、同じく小倉進平博士は「御國淨瑠璃」（明治四十三年）と題して更に言語研究さへ發表されて居り、何れも「仙臺叢書」第十二卷の一部（昭和四年六月）として刊行、是には又「鞍馬破り」の一段さへ拾錄されてあるのであるが、例へば小倉博士が紹介される如く（四一三頁上）

（略）寛文以前に存して居つた所謂古淨瑠璃の全國到る所に既に消滅して仕舞つたのに獨り我が仙臺に殘つて居るものであらうと云れるのである

か否かは兎に角、「仙臺鄕土資料」（仙臺市、無一文館書店）叢書の一として同姓異人たる小倉博氏が數十種目の中から四篇を錄して「御國淨瑠璃」（昭和七年七月）なる單行冊子を上梓する時世に、場所は南北の違のみであるのに

如何なる譯か、屢々人の口端筆先に名稱だけは登る割に彼の所謂豐後淨瑠璃（土音ジョーロリ）なるものに關しての記述說明を求めると誠に寥々たるものであつて、例へば坪內博士記念演劇博物館篇「國劇要覽」（昭和七年五月）に於ける飯塚友一郎氏の眼界に於ても全然白紙なのである事などを思ふと、其の內容形式共に藝術的價値は暫く問はず、吾人は是より以下今や珍重す可き此の九州方言文學資料に一瞥を吝む事は出來難い次第なのである。

一般的な見物記は幾多頻出した中で、菊池淸（幽芳）氏がその「別府溫泉繁昌記」（明治四十二年五月、如山堂、絕版）で（五五頁）

老妓の何とかいふのが一段豐後節を語つて聞かせる、一種の滑稽淨瑠璃でお國言葉丸出しの頗る振つたもの、聞くほどのものを必らず抱腹絕倒せしむる、文句だけでは情は移らんが御愛嬌までにその一節を御覽に入れる、併し斷つて置くがこの豐後節誰でもざらに聞けるお廉（ナス）いものと思つたら譯が違ふ、もしこの老妓でもどうかなると別府にはこの野趣橫溢なる豐後節を語るものは一人もなくなるのだ、惜しい事だ、今の中若い妓等に仕込ませて別府の名物にするがよからう

と云ふ樣な老婆心も、何時しか二十年の歲月を閱して了つた今日此の頃では、民俗學的の興味と方法とを以て該地方農村を丹念に歷訪探索しなければ、最早全き姿態に接する事は既に已に頗る困難となつた樣であり、やがてはそれこそ面影さへ九州に於ても都會在住者の記憶からは消滅して了ふのであらうとすると、强ち中央都會人の手になる文獻と云ふ意味ではなくても仙臺淨瑠璃を寫生した彼の蜀山人が「粹町甲閨」（安永一七七二—一七八〇年間）や三馬が「浮世風呂」前編（文化六年一八〇九）の如き物が見當らない限り、幽芳氏が右の隨筆の後へ書留められた一齣は固よりとして、白秋氏がその

「季節の窓」（大正十四年五月、アルス、絶版、「白秋全集」第十三巻所收）の「九州風俗」に記錄された（三三三―八頁全集四五四―八頁）程のものさへ何時何處でも右から左へは眼に入れ難い以上、宮武省三氏がその「習俗雜記」（昭和二年二月、坂本書店）の所謂「豐後唐人」の項に於て指示される（一〇七―一〇頁）本文なども目下の所、他鄉人には尊重す可き手掛となつてゐる有樣なのである。

抑々此の豐後淨瑠璃なるものは、宮古路豐後掾が享保十五年（一七三〇）江戸へ下つて大流行させやがて常盤津、富本、淸元の三流を派生させた彼の都會藝術たる豐後節卽ち例へば山東京傳が「戲作四書京傳予誌」（寛政二年一七九〇）の一部にも題名に用ゐられてゐる所の物とは類名異物――名稱は時に混同、否顚倒さへされる事がある樣だが――の原始音樂たるは周知の事實としても、九州東北部地方の農家で酒宴醡なる時別に三味線等を用ひず（是は古淨瑠璃の本質上當然と考へられるが）素人の口頭に上される低級、寧ろ淫猥な歌詞であると云ふ以外は、その曲目種類や分布區域の由來變遷を尋ね出すと滿足な回答を與へ得る人々は案外少いらしい。現狀だけに限つて見ても方言差は勿論だが內容も多少の流動性は免れない樣である。曲目も「渡邊綱」一番しか存在しないと云ふ事實も可なり强く肯定されるし、尤も大分市在住の堀江與一氏からの間接知識に由ると十數種を採集した人があるさうだが、種々に想像解釋される中にも少くとも古老口傳に由る現存正統的のものとしては矢張り此の綱館の藝題のみが最大分布範圍を有する事だけは確實な樣に推せられる。分布範圍に就ては同じく大分市在住の市場直次郎氏の御報告に由ると、發祥地少く共本場と目され得るのは東國東郡及び速見郡地方である事が言語上から推理されるさうであるが、今日では豐後一圓は無論として、是は「大阪朝日新聞」の昭和五年三月に五回に亙つて連載された小宮豐隆氏が「『方言』への愛着」にも見當ら

ない樣であるが豐前でも例へば宇佐郡方面では行はれて居り、自分の最近直接見聞を示すと同じく下毛郡耶馬溪村には語手が確かに二人程居住してゐる筈だし、更に筑前でも嘉穗郡に於て曾て聞かれた村があると云ふ諸知識を綜合すると、北九州の西部へも可なり浸入して居ると論斷出來よう。參考の爲煩を厭はず「渡邊綱」を轉載するに當り、菊池、北原、宮武三氏の採錄は言葉付に於て皆異つて居るが、此處には比較的品位良き北原氏のものをそつくり拜借する事にし、只頁數の便宜上からして組方の體裁は私案を以てする。

第一段

昔昔、渡邊ん綱ちふやたあ（昔々、渡邊の綱といふ奴は）、上んぢーかり、下んぢーかけち（上の里から下の里へかけて）、あつちあられん、ちえんぷな、えれえやつなる（あつてありようのない、非常に偉い奴である）。大江山やめー、鬼うー狩りーいくちふち（大江山へ鬼を狩りに行くと云つて）、朝んつーかる、はね起きち（朝は疾くから跳ね起きて）、うらん溜いきいちあー（裏の溜池へ行つては）、つらあのんぼりくんだり（顏を上に下に）、二三ぺんけー撫ぜち（二三べんかき撫でて）、がた〳〵せつちんにや駈けくうぢ（がた〳〵と雪隱に駈け込んで）、くさあ小山んしこほご（糞を小山の量ほど）、ごた〳〵〳〵巻きにーぢ（ごた〳〵〳〵巻きぬいで）、もごつちえきちえ（戻つて來て）、けれーんへこすきゆ（家來の凹助を）、けつち蹴まはしや（蹴つて蹴りまはすと）、おへま、納戸ん隅かる（おへまは納戸の隅から）、赤べこかき〳〵ぢえちえ來ちえ（赤い湯文字を掛け〳〵出て來て）、『あんた、なに云ひやんするかな、こん米んたけえに（こんなに米の高いのに）、わしあ、晝めしてーち（わしは晝めし炊いて）、あげやんせんぞな。』ちふつ（と云ふと）、綱ん（綱は）、『かかあ、うんがなにう知つたこつがあ

るか。』ちふち（嬶ア、貴樣が何を知つた事があるかと云つて）、おへまぐけつかぶ蹴つちえ蹴あぐりや（おへまの尻株蹴つて蹴上ぐりや）、おへま、あいた、うーんちふち（おへま、あ痛たうーんと云つて）、くせえ屁をたれた。

第二段

やんがちんころ、まやん隅かる（やがての頃、馬屋の隅から）、やせうも一匹ごだびきでーち（痩馬一匹曳き出して）、風あー吹く吹く石あーつーぢ（風は吹く吹く、石は飛んで）大江山にぞつきにける。

註に曰く　これから愈愈鬼退治になるのである。大江山と羅生門とが混線して來る。

第三段

やんがちんころ、何處こん此處こん知れん黒雲ん中かる（中から）、綱ん甲んしころーぐいこつかまゆりやあ、綱ん、行かうごちすりや、ごち〳〵〳〵、戻らうこすりや、ごち〳〵〳〵、行こん戻ろんなつちえくせえ（行かうも戻ろうも出來やしない）、綱ん親重代の鰐丸、腰のだんびらごだびき出えち、『切るる切れんな鍛冶屋が知つちよる（切れるか切れぬか鍛冶屋が知つてる）。光れ光れ』ちふち、打ち振んにける。

第四段

綱ん、よくよく見るこ、鬼のうぜがもげちよつた。綱ん、よろくうじ（喜んで）、持つちえ戻つちえ、納戸ん古びち入れちよきやあ（入れて置くこ）、二日ん三日ん經つた頃、婆ぐ、下駄ん音ん、からんころん言はせち、やつちえ來ち、『綱綱、わがーこんうちや、ちえんぶな偉えこつしたちふが（綱綱、お前はこの間は非常にごえらい事を爲たこ云ふが）、おり、そんおんのうじう見せんか。』ちふち（俺にその鬼の腕を見せないかこ云ふ）、綱

ん、『いんねーいんねー。』ちふつ（否だ否だと云ふと）、『さう言はんつ、見しのう。』ちふつ、綱んやたあ圖に乘りやがつて、納戸ん古びちかり、鬼の胸う持つちえ來りやあ、婆ぐ、ちええ（手に）持つちえ見ちえ、『こーり、こり、（これだ、これだ）こりこす（これこそ）、おりがうぜちや。』ちふち、けむりだしう突きにしぢ（煙り出しを突き破つて）、黑雲になつて失せにける。綱ん、『計られた。』ちふち、地團ご踏んち、かまぎーくれちーち（俄に啖らひついて）、男泣にぞ泣きたりける。

右の樣な體裁であるが、九州方言とは言つても東北地方のものであるから餘り明白な特異性は存在しない所に却て味と趣とが溢れてゐるのであつて、宮武氏の拾錄に見ゐる「綱ン非道威奴のう」の如きは寧ろ不純分子の混入と見做す可きものなのであらう。若し夫れ渡邊綱と豐後との關係因緣如何と云ふ論究の如きは、目下の吾人には稍々焦點を逸する形となるから、是は諸事共に今後識者の敎示に待つ事にし度い。

吾人が體系的國語學書目に眼を通す時、又かと思はれようが實に東條操氏が「國語の方言區劃」（昭和二年三月初版）に於て（三頁）記される如く

それにしても東北地方の方言や出雲方言や、九州方言の研究が近年まで二千餘年も全く打棄てられておかれた事はまことに嘆はしい次第である

が、時勢は遂に昭和五年十月二十八日より翌年三月十一日に亙つて日本放送協會九州支部が行はしめた九名九回の努力は「放送講演集・九州方言講座」（昭和六年五月）の小冊子を產ましめ、是は

笹月清美氏　「九大國文學」第一號（昭和六年九月）
石坂正藏氏　「方言」第一卷第一號（同　　同　）
吉町義雄氏　「同」　同　第二號（同　　十月）
右　正　誤　「同」第二卷第十一號（昭和七年十一月）
今泉忠義氏　「國學院雜誌」第三十七卷第十號（昭和六年十月）
中村直勝氏　「歴史と地理」第二十九卷第一號（昭和七年一月）

の論評に於て門外漢にも其の價値が納得出來る筈である。又九州人なる澁川柳次郎（玄耳）が隨筆「獨語」（大正三年二月、誠文堂）に於て約二十頁を割いて採錄してゐる「九州言葉」の如き卽興的而も孫引的な資料は殆どその煩に堪へられまいし、從つて吾人が求める所の物には一定の制限が附せられる以上、東條氏が雜誌「國語と國文學」第六卷第一號（昭和四年一月）で（二四〇頁）

殊に九州方言に一部をも發見する事のできない事は寧不思議である

と洩らされるのも決して無理でなかつた古資料も今や數箇發見されてやがては覆刻され了らうとして居るし、只是が岩波講座「日本文學」の「方言研究の概觀」（昭和七年六月）で（二三頁）

鹿兒島には何かありさうなものと多年探してゐるが未だ一冊も發見しない

とされるのだけは、彼の島津齊彬（文化六（一八〇九）生安政五（一八五八）歿）が嘉永（一八四八一八五三）初年頃の所謂「ローマ字日記」（鹿兒島市外、尙古集成館藏）をでも問題にしない限り、どうやら動かない所らしい樣である位に至つた。更に「日本文學講座」第

九卷（昭和二年八月）の「方言研究と方言文學」（改訂新版第十四卷所收、同七年十一月）で（一七八頁改訂新版二八六頁）

獨り、九州に至つては北原白秋氏や、德富蘆花氏や、大泉黑石氏の作の中に多少の方言の現はれぬでもないが、未だ方言文學を以て目すべき作は一つもない

とされてから數年ならざるに、假作の稱呼を冠し得可き作品さへ既に發見や發表された事は最早此處に改めて繰返す迄もあるまい。自分としては着手すれば恐らく際限のあるまい言語地理學上の課題を如何に一段落付く可きかと云ふ考慮の外に、中央の學界の進運と刺戟とに由る九州方言史上の新資料の發見と既資料の完備とを鶴首して待つのである。

今から十年後若し機會あつて自分又は誰かゞ九州方言に關して如何なる事を物し得る哉は兎も角、例へば得能文博士が「淺人零語」（昭和三年十一月、第一書房）の「都會と地方」（大正八年六月）の中で（二一六頁）述べられる

（上略）地方行は學問の斷念である（下略）

と云ふ半面の眞理は日本の國情と自分の業務とに對して寧ろ今後益々深刻に迫つて來るらしいのであるが、幾多の既知未知の先輩や同好者へは勿論ながら九大法文學部、同附屬圖書館、特に同國文學研究室の關係人士及び機關に對して深甚なる謝意を表する。〔完〕（昭和八・一・廿五）

都合に由り「補正」は次輯へ掲載する。